

長浜教区中期教化研修計画の点検総括

はじめに

長浜教区中期教化研修計画は、宗務所が策定した真宗同朋会運動推進「中期教化計画（2005年度～2010年度）」に先立ち、2004年度～2013年度の10年間に及ぶ統一テーマ「浄土の家族」を設定し、第1期（3ヵ年）：濁りをみつめる～寛容、第2期（4ヵ年）：生きる力に出会う～本願、第3期（3ヵ年）：朋と語ろう～共生を教化骨子とし策定されました。

計画の願いとするところは、濁世の中で「念仏申す身になること」に尽き、骨子に毎年度の教区ならびに組の教化方針を肉付けして、立体的で重層的な教化体制の構築が志向されました。計画実施に伴い諸課題に対応すべく、2008年度からは教区教化委員会組織が現体制に改編され、寺族、門徒、青少幼年など対象を絞り込み、より実情に密着した丁寧な教化の場を開くことが願われました。

(1) 統一テーマ「浄土の家族」、教化骨子について

宗教離れ寺院離れが加速する状況にあって、教区教化事業のひとつであった寺川俊昭大谷大学名誉教授による「教行信証～証の巻講義」の中で、先生が現生正定聚を示す言葉として語られた「浄土の家族」を統一テーマに選びました。

テーマ選定にあたっては、教えに出遇った者が教えを証明しながら生きるという意味を、現生正定聚に見い出し、「浄土の家族」の「浄土」に「親鸞聖人の教えに出会ってありがたい」という宗教的感動の根源となる教学の回復を、「家族」には念仏を中心とした人間関係創造への願いを託しました。

しかし教区内への発信力不足、周知不足から浸透度が低調で各組、各寺院の受けとめや展開が、教区において見直され確認されることもなく、教区→組→寺院→組→教区という往復運動には至らなかったといわねばなりません。各組の実情に則した教区からの具体的な課題の提示と、組内における課題の共有が強く望まれるところです。

(2) 教化計画実施にあたっての点検

就業形態の変動とそれに伴う家族構成の急激な変化により、僧俗ともに寺院へ積極的に関わってくださる人員や後継者が減少し、教化活動への参加時間が制約を受けています。このことは個々の経済的負担の増大とともに、寺院側からは「門徒の無関心と伝統の軽視」と認識され、門徒側からは「住職への不満、住職による寺院の私有化、寺院への不信感」に直結しており、深刻な課題となっています。

同時に団参などで別院や本廟に身を運ばれる方々は同信、同行の交わりを以て「聞法に生きる」確かさを再認識するという充実感をいただいております。このことは被災地支援活動等、人を通し枠組みや地域を越えて多様な価値観とふれあうことが、生きる力を教えに確かめる機縁となることを示しており、今後の教化活動のひとつの方向性を与えていると考えます。

(3) 教区教化における課題と展望

教区教化委員会が発信する内容を、各組教化委員会・各寺院で受けとめ、確かめ、伝えることを協議する場として、組教化委員会定例会、寺院月例役員会、寺院同朋の会を開催し、その内容をより充実させることや、住職・坊守・寺族、門徒が連れ立って他寺院や組、別院の教化事業に参加する機会を増やしていただくなど、「私たちの寺」の公開性と開放性を重視して内・外部との交流を深化させることが大変重要といえます。なぜならそのような住職・坊守の姿勢が門徒の意識に反映すると考えられるからです。

寺院を取り巻く厳しい社会情勢は、そのまま住職・坊守と門徒との信頼関係を確認し、再構築していく機会ともなるのではないのでしょうか。住職・坊守の遅々としながらも確かな歩みがあればこそ、門徒方もその姿に信を置くことにつながるでしょう。その時僧俗共なる歩みが一味となり、開かれた道となります。そのことが教学の研鑽に対する不安と、経済的不安に立つ真の力となると思われまます。

過疎によって提起される寺院の合併や、女性の寺院・組・教区運営への参画推進も、重要な共有の課題として公開性を保ちつつ、一人ひとりが「真宗門徒として」協議できる教区教化の場を開く必要があります。